

# 短歌季評

今回は、「短歌研究」を取り上げてみたい。これは角川の「短歌」と並ぶ権威ある短歌総合誌だそうで、現在出版されている短歌専門誌の中では一九三二年創刊と最も古い歴史を持つそう。発行所が「短歌研究社」になっているが、講談社の「音羽YKビル」に入っているの、実質は講談社が発行しているのと見るべきだろう。

まず全体を見ると、玉石混濁で、いい歌、優れた歌もたくさんあるが、現代の風潮に合わせた浮薄な歌もたくさんある。この入り混じっている相貌に、奇妙な奥行があり、総合してみると現代の日本では最も高いレベルにあり活気があると言っている。

二〇二四年三月号は特集として「能登、北陸の歌人たち」と作る「短歌研究」があり、最初にこの言葉を見たとき、能登の地震のニュースに合わせた迎合的な特集のように思えて、首を傾げたが、読んでみるとかなり腰の据わったものになっていて、タイムリーさを乗せながらなおかつこれだけの重みをもたせて編んでいる編集には、感心した。

特集の最初は「ふるさとの能登に、祈る歌」とある岡野弘彦の歌になっている。

など、さすがに短歌の醍醐味を感じさせる深みがある。

これに第四部として、「能登、北陸の歌人たち二十八人の新作短歌」五首ずつがある。

確かにこれらの歌の量によって、能登の地は身近になり、地震の被害も迫ってきて、立体的な災害の実感はそれなりに立ち上がってくる。よくここまで用意したと、特集として揃いあげたパワーには圧倒されるが、それらを読み終わって、では何が残っているかという、ちょうど地震と津波が通過していったように、迫力ややさしさは残るが、胸の底に静かに降りてずっと留まるようなものはない。むしろその多さと迫力が心に降りるものを妨げている印象がある。特集としては成功しているが、歌としては成功していない。

しかしそれにしても、これだけの特集を短期間で編み、ものにする手腕は並大抵のものではない。私はここに編集者のパワーと並々ならぬ技量を感じる。奥付を見ると編集は國兼秀二とある。これはやはり、一短歌誌の編集者ではなく、講談社という総合出版社のやり手の編集者の仕事であり、しかもこの分野にかなり情熱をもって持続している人間の仕事である。

一方で古典的な領域にも理解をしっかりと示し、また逆に「うるせえドライヤー」（北山あさひ）「年賀状ありがとうね太陽の〇のかたちがわたしをのぼる」など若い層の浮薄

伊勢・大和、山脈ふかき村に生まれ、海知らざりし 七歳の我能登はわが父の故郷。初めて父にとまなはれ、見し海原の色を忘れず

あてどなく 海辺の道をさすらひて 成すすべもなく、泣きあたりけり  
潮騒のとどく家に一夜寝て、眼ざめし朝の心、清しさ

句読点のつかい方や一字あけに流れの悪さを感じるが、腰のどっしりした言葉の重みには、揺るぎのないものがあって、ニュースへの迎合性を打ち払っていた。

続いて三井修の歌「龍が頭を振る」という地震を龍に擬人化しての歌三十首も、大胆な比喩に迫力がある。

故郷は珠を唾える龍にしてこの日身震い人を殺めぬ  
龍が頭を大きく揺らし波立たせ家、道壊し人を殺めぬ  
声殺し鳴咽をするという事の幾とせ振りか故郷潰え

永井正子の「一瞬にして」も、臨場感を盛り上げてくる。  
揺れながら真向かふ襖が菱形に歪みて直り再び歪む  
倒壊の屋根を跨ぎて人逃る津波が足に迫りくる道

これに第二部、第三部として、古典や有名歌人の能登の歌を集めて、能登の風土を立ち上げている。

土屋文明の歌  
珠洲の海のいたる波に入日さし赤崎かけて船もこがずも  
宮格二の歌

両岸に街の灯更けてひろびろと夜の犀川の川幅は見ゆ

な部分もしっかり取り入れ現代風もアレンジしていて、満遍なく、間口を広くしていることにも幅を感じる。「コントde短歌」などの低俗だが楽しめる領域も用意し、また一九七〇年代の短歌史も組んだりして、奥行も失わない。歌集歌書評も抜かりがない。特に感心するのは、末尾の「短歌研究詠草」で、投稿歌を毎月募集し、それに点数を与えて参加向上システムをがっちり具備している点だ。吸収と循環によって膨らんでいく脚部が、みごとに社会に立っている。

いま、ここまで総合的に見てみると、短歌雑誌としての力は、やはりこの「短歌研究」が突出しているだろう。これは何よりも編集長の力が大きく、講談社の美点を最大に発揮した編集力によって、この誌の活気と幅が実現している。この賑わいは現代の日本の短歌界の頂点をなすものにはちがいない。これだけの賑わいと主峰をなせる短歌雑誌はほかにはない。ただし、ここには賑わいと主流らしい総合性はあっても、方向はない。湧き上がるものを束ねて掻き立てる力はあっても、何を目指し、どこへ行くべきか、志はない。総合出版社の限界と言えば限界だが、湧き立つことはあってもうねりにはならない賑わいに留まる危惧はある。

(五十嵐勉)

## 七たび歌よみに与ふる書

連載第七回

## 正岡子規

前回、言い残したことにしてもう少し加えましょう。宗匠的俳句と言え、直ちに俗気を連想するように、和歌と言えは直ちに陳腐を連想してしまうのが年来の習慣で、挙句の果てには和歌という字は陳腐という意味の字のごとくに思われてしまっておりま。このように感じている者は和歌社会にはまったくいらつしやらないと思いますが、歌人でない方はだいたいそのように感じているのではないのでしょうか。そんなときどき和歌をそしめる人に向かって、さてでは和歌をどのように改良すべきかと具体的に尋ねてみると、その人は首を横に振って、いやになるほどに和歌は腐りきってしまったので、どのように改良すべきかその方法もない、だからそのままにしておくしかないと言いつつ様子は、まるで名医が匙<sup>さし</sup>を投げてしまった死に際の病人に対するがごときに見えます。実に、歌は、色青ざめ呼吸も絶えようとしている病人のような状態です。

ですが、私の考えはたいへん違って、和歌の精神こそが衰えてしまっているのであって、その形はなお保持されているはずなので、今こそ精神を入れ替えなければ、再び健全

な和歌となって文壇を駆け回ることはできないということです。これは言わなくてもいいことかもしれませんが、その人がもう希望のいつさいない病人だと見なしているのは、いかにも和歌の腐敗のはなはだしいことにあきれはてて、外側だけ見て投げ出してしまったにちがいありません。和歌がいかに腐敗してしまったか、そのはなはだしさは、このことからもだいたいことは知ることができるでしょう。

この腐敗と申しますのは、趣向の変化がないことが原因で、また趣向が変化しないのは、用語の少ないことが原因と思われま。ゆえに趣向の変化を望むのであれば、ぜひとも用語の領域範囲を広くしないわけにはいかないでしょう。用語が多くなれば、それに従って趣向も変化が可能になります。ある人たちが私を見て、和歌の領域を狭くする者と言ったのは誤解で、少しでも広くしようというのが私の目的です。とは言え、いかに区域を広くするといっても、文学的でない思想は容れるわけにはいきません。非文学的思想とは、理屈のことです。

外国の語も用いよ、外国の文学思想も取り入れよとおっしゃることに、これらを、日本文学を破壊するものと考ええる方もおりますが、それはすでに根本において誤っています。たとえ漢語の詩を作るにしても、洋語の詩を作るにしても、はたまたサンスクリットの詩を作るにしても、日本人が作るといふ以上は、日本の文学に相違ないものです。唐

正岡子規



の制度にならって位階も定め、服の色も定め、年号も定めて、唐様の冠位を着けても、日本人自身が組織した政府は日本政府と申すべきでしょう。イギリスの軍艦を買い、ドイツの大砲を買い、それで戦に勝ったとしても、それらを運用したのは日本人であるならば、日本という国の勝ちというべきでしょう。しかし外国の物を用いるのは、いかにも残念なことなので、日本固有の物を用いようとする考えは、その志には賛成いたしますものの、現実にとっても日本の物ばかりでは物の役には立ちますまい。文学においても、馬、梅、蝶、菊、文などの語をはじめ、いつさいの漢語を取り除いてしまったら、どんなものができるとのでしょうか。

「源氏物語」「枕草子」以下、漢語を用いたものを排斥してしまつたら、日本文学はどれくらいのもが残るでしょうか。それでもやせ我慢して、歌だけは日本固有の語で作ろうと決心する人がいたら、それはその人の勝手なのではしうが、それをもつて他人を律するのは無用のことと言わねばなりません。日本人が皆日本固有の語だけを用いることになつたら、日本という国は成り立たなく

なつてしまふように、日本文学者が皆日本固有の言葉だけを

用いるようになったら、日本文学は破滅してしまふでしょう。あるいは姑息にも、馬、梅、蝶、菊、文などの語は、たいへん古い時代から使われてきたので、日本語とみなすべきだろうなどと言う人もあるかもしれませんが、古代の人は、そのころ新しく輸入した言葉を用いたのであって、この姑息論者が当時に生まれていたら、それをも排斥していたでしょう。笑うべき撞着です。仮に姑息論者に一歩譲って、古い時代に使っていた言葉だけをい用いるとして、もし王朝時代に用いた漢語だけ加えてそれらを十分に用いたとしても、なお和歌の内容の変化すべき余地はあることになるでしょう。

それでもなお、歌の言葉と物語の言葉とはおのずから別であり、物語にある言葉でも、歌には用いることのできないものが多いなどと、例の歌よみは言うでしょう。これも何たる笑うべきことでしょうか。いかなる言葉でも、美の意識を運ぶに足るべきものは、皆歌の言葉と言ふべきです。これ以外に歌の言葉というものはありません。漢語でも西洋の言葉でも、文学的に用いられるものであれば、皆歌の言葉と言ふべきでしょう。

(明治三十一年二月二十八日)